
そして死神少女は、過去を運ぶ。

平山ひろてる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして死神少女は、過去を運ぶ。

【Nコード】

N5685W

【作者名】

平山ひろてる

【あらすじ】

死神少女が見つめたのは、一人の少年の姿。人の過去を運び続ける死神少女が求めたのは、きっと一つの救い。この物語は、死神少女と人間の、時に悲しく、時に甘酸っぱい、そんな関係を描いたものである。

プロローグ 「夏若葉の章」

プロローグ 「夏若葉の章」

世の中には色々と思議な事がある。

俺こと山中佑介は幽霊が見える。

誰に言っても本心では信じない事がわかってるので、誰にも言わない事にしている が、本当に見える。

それに関して、一つ思い出があった。

ある日の夜。

俺はコンビニの前でたそがれているオッサンの霊を見つけ、どうしたのかと話しかけた。

オッサンは一人、借金を苦に自殺した事を、家族に謝りたいのだという。

俺にはどうしようもないのだが、話を聞いていると突然、ドクロの仮面を付けた、和服姿の少女が現れた。

俺にはあれが霊だとわかった。本能で感じ取ったのだ。

そして、少女は大きな鎌を持っていた。

俗に言う死神の鎌のようなものだ。

氷のような雰囲気をかもし出しながら、徐々に近づいて来る。オッサンは死神の鎌を持った少女を、ただただ見つめていた。しかし動くとはしなかった。動く事が出来ないのかもしれない。

じりじりと、歩み寄る死神少女。

オッサンと死神少女は向かい合い、何か言葉を交わしていた。やがて、オッサンは会話を終えて笑った。そして、少女は鎌を構え、

横一線でオッサンを斬った。長い黒髪を揺らし、可憐に舞う。

すると、オッサンはその瞬間に消え去ってしまった。

「ご冥福をお祈りいたします」

少女は呟く。

何が起こっているのか、俺は見えていないフリをするしかなかった。

ただただ。目の前で起こった惨劇　とはいえ、オッサンは既に死んでいるのだが　に身体を震わせた。

そして、過ぎ去るまで携帯の画面に目を落とした。

「……見えていないですね？　まあ、見える訳が無いですか……」
俺の顔を覗き込む少女。

焦って俺は間違えて携帯の、画面が鏡となる機能を、オンにしまった。

そこで見た姿は、この世ならざる美貌を持ったものだった。

ドクロの仮面を外したそこには、夜の闇に溶け込みそうなくらい、艶の良い、ダークブラックの長い黒髪を揺らした少女の姿。くrikりと大きな目でありながら、漂う京美人の如き優雅さと、そこはかとなく纏った儚さ。薄暗く、ぼんやりとしか見えないが、それでも、今まで俺が見た中でも、最上級の美貌を持っていた。

「さて、次のお仕事に行きますか」

やがて、少女は去って行った。

非常にバカバカしい話なのだが、俺はこの死神少女に一目ぼれしてしまった。

年月が経った今も、俺はあの顔を覚えている。

それはともかく。

季節は巡り巡って、夏。

いつも通りのかつたるい朝を迎えた俺は、ベッドから身体を引きずりながら、重い瞼を思い切って開く。

いつもと何一つ変わらない。

目覚まし時計が鳴り響いている事も、カーテンの隙間から、ささやかな光が差している事も、この部屋には俺しかない事も。

俺しかない？

何故だろうか、俺はそこに違和感があった。

「誰だ？ こいつ？」

そこでふと隣を見ると、着物を着た黒髪の少女が、俺とは反対側に顔を向けて眠っている。

「霊か」

まあ、たまにある事だ。何か、勘違いでもしたのだろう。

皆が見えていないだけで、実際こういう事はよくあるんだからな。まあ、それはともかく。

起こさずにそっとしておこう。

俺がそう思っただけでベッドを立とうと決意した瞬間、少女は俺の方に向かって寝返りを打った。

「あ——————！！」

刹那。

今までゆっくりとリズムを刻んできた心臓の音が、テンポアップを始める。

何故なら、そこにいた少女は、かつて俺が一目ぼれした死神だったからだ。

「……ふわあ」
しまった。

思わず声を張り上げてしまった。このままでは起きてしまう。気付かれてしまう。

「……」

しかし、一步も動く事が出来なかった。

脳は動けと命令しているのに、身体が全く言う事を聞いてくれないのだ。

「……ん、つーちゃん、わたくしはまだ勤務時間ではありませんよ……って、え？」

眼をこすりながら、少女は身体をむつくりと起こす。視界を確認した少女は、顔をさーっと青ざめさせた。

「や、やあ。俺は山中佑介」

眼が合ってしまった。反射的に俺は自己紹介をしてしまった。

「ご、ごきげんよう。わたくしは天界死神庁日本支局、移送三課長の三条桜子と申します」

少女も反射的に自己紹介を返すが。

天界？ 死神庁？ 日本支局？ 移送？ 三課？

朝の寝ぼけ頭では処理が追いつかない。

「え、えつと。さ、桜子？ お前は一体何なんだ？」

「死神です」

にぱっと笑う少女。その手には、鎌が握られていた。

「えつと、俺はこれからどうなるんだ？」

「記憶を消去させていただきます。えつと、あれ？ 以前お会いした事ありますよね？」

「う、うん、一度」

「まさか、こんなヘマをやらかしてしまうなんて……これは始末書モノですね……。では、日常にお戻り下さい」

がくりとうなだれた桜子は、振りかぶり、鎌を俺に振り下ろす。折角名前を知ったのに、記憶を消されてたまるか！

「あ、こら！」

振り下ろされる鎌から逃げ、俺は部屋から飛び出す。
後ろからは桜子の怒号が聞こえてくる。

これが、俺と、死神桜子との、初めての会話だった。

「いざなみ様、姿を認知させていただきました」

携帯電話を取り出し、わたくしは電話を掛ける。以前に会ったことがあるとは、言う必要がないだろうし、言わなかった。

それは天界死神庁の日本支局長、いざなみ様だった。

『仕方ないわねえ。それなら桜子ちゃん、あなた少しその人間と一緒になさい』

「……え？ 記憶を消して終わりではないのですか？」

『嫌なのかしら？』

冷たい声と同時に威圧感が電話越しに伝わる。

いざなみ様は怖い。睨まれたら動けなくなる。

「い、いえ！ 申し訳ありません！ わかりました！」

だからわたくしは逆らわずに命令に従った。中間管理職のツライところだ。

『わかればよろしいー。経過報告を、随時私に行うようにー』

「は、はい」

電話は切れた。

しかしこれからどうすれば良いのか。

いざなみ様はこの状況を面白がっている。

お堅いと思われているわたくしが殿方と同棲をして、どのような反応をするのか、天界から眺めているに違いない。

経過報告なんて必要がないのだ。

「でも、なんて言えばいいのかな……」

課長であるわたくしには数名の部下がいる。

その一人の姿を思い浮かべながら、また怒られてしまっただろうな、とそんな事を思いながらため息をついた。

第一話 「春椿の章」

第一話 「春椿の章」

「朝から災難だった……」

一度部屋から飛び出し、速攻で制服に着替え終わった俺は朝食も取らずに、学校へと向かう。

「どーしたの？ そんな暗い顔してさっ！」

「いつでえ！」

通学の途中、思いっきり背中を叩かれた。こんな事をしてくれるのは一人だけだ。

「おい、つばき。いてえじゃんか」

「いやー。なんか佑介の背中があたしの気合を欲してたからね」

短い茶髪を揺らしながら、悪びれる様子もなくへらへらと笑うのは、幼馴染で悪友の鈴森つばき。

イマドキの女子中学生って感じなのだろうか？

よくわからんけど。

「確かにすつきりした」

「でしょ？」

背中のはりひりとするが、確かに気持ちは入れ替えられた。

「そっぴやさ、つばき。お前、幽霊って信じるか？」

歩きながら、俺はつばきに尋ねる。

どんな顔をされるかと思ったが、彼女は意外な返答をした。

「んー？ 信じるよ？」

「なんでだ？」

「んー……。なんとなく？」

少し考えるように首を傾げ、つばきは答えた。

「なんとなくか」

「そりゃ、なんとなくでしょ。佑介は？」

「ああ。信じてるよ」

「はは。それでさ、どうしたの？ 元気無いよ？ 幽霊絡みでなんか嫌な事でもあったの？」

「信じて貰おうとは思わないんだけど、今朝死神に会った」

朝の着物姿を思い浮かべながら言う。

少し顔が笑っていたかもしれない。にやけていた、という方が近いかもしれないが。

「へえー。そうなの？」

「それが聞いて驚くな。すげえ可愛いんだ。着物着ててさ……」

「可愛い死神ねえ……」

つばきは何とも言えない顔をしていた。

「確かに可愛い幽霊なんて腐るほどいるんだけど、今回の娘は飛び切りなんだ」

怖い幽霊が多い反面、本当に可愛い霊も多い。

「……佑介がそんな事語るなんて、その死神が好きになったの？」

「ちよつと前にも一度会ってるんだけどな。一目ぼれしちゃった」

「ふーん……。でも死神でしょ？ 天界に魂持ってかれちゃうよ？」

「それはそうなんだけどな」

俺の中にある死神のイメージは、やっぱりドクロの顔に黒いローブ、そして大きな鎌で、人の命を持っていくというものだ。

正直、良いイメージは無い。

しかし。

あの桜子という死神は、そんなステレオタイプの死神とは全く違う。

雰囲気も違うのだ。

「まあ、他の人には言わない方がいいかもね！ 変な人だと思われるだろうし？」

「あ、やっぱ信じてないな？」

意味深に笑いながらつばきは言う。

「どうかなー？」

小さな頃から長い付き合いだが、こいつは本当にわからない。

掴みどころが無いと言うか、ふわふわしてるというか。

「まあいいんだけどさ……」

そんなわけだから、俺はあまり気にしない事にした。

「うーっす」

「おはよー」

朝の教室に入ると、俺とつばきはそれぞれの友人の所へと向かう。

「よう、佑介」

「おはよ、修二郎」

一応黒髪にしるとの校則があるのだが、全力で校則に反抗している金髪にピアスのガッチリした大男。

岡田修二郎。こいつも俺の悪友だ。

俺、つばき、修二郎の三人でグループを組んでよくイタズラをしていた仲だ。

「どうしたんだ？ そんなやばい顔して」

そんな修二郎が、俺の顔を覗き込みながら深刻そうな声で言う。

「マジで。そんな顔してる？」

「いや、嘘」

心配して顔を触る俺を見ながら、修二郎はけろつとした顔で言い切る。

なんて奴だ。

「嘘かよ！」

「嘘だけどよ、何かいつもと違うぞ」

しかし、心の中の動揺は見抜かれてしまっていたようだ。

こいつは人の些細な行動、言動をよく観察している。

だからこそ人気があるのだが、見てくれのせいで怖がられてもい

る。

「恋だよ」

「うっそ。マジで？ 誰？」

「わかんねえ」

桜子、と名乗った事、死神という事はわかるが、それ以外の情報が無い。

そうとしか言えないのだ。

「何だそれ？」

修二郎は訝しむような視線を俺に送るが、こうとしか答えられない。

「俺にもわからんけど、恋だ」

「たまにワケのわからん事言うな。佑介は」

馬鹿にするように笑う彼を見て、俺はさらりと言い返した。

「お互い様だろ」

「まあな。それはともかくさ、佑介。恋と言えば頼みがあるんだけど」

突然脈絡もなく話が切り替わった。

いつにもなく真剣な表情に、俺は身構えた。どんなシリアスな話が展開されるのか。

「ん？」

「お前、遠野さんと話すだろ？」

遠野遥。

彼女は俺達のクラスメイトで、つばきの友人だ。

俺もつばきの友人という事で、たまに話す。物静かで人見知りする少女だ。綺麗だが、あまり人と話さない。

まあ、修二郎とは全く違うタイプの人間である事は確かだ。

「あー。遠野？」

「おう。ちよっと仲を取り持ってくれよ」

ずいっと体を近づけて来る修二郎。なんだこの目は、いつにもなく真剣だぞ。

「なんでだよ」

「コケろうと思ってさ」

思わず笑ってしまいそうになった。

つか、笑った。

確かに世間を見ればこんな正反対なカップルはいくらでもいるが、間近で見ると何とも言えない感覚に襲われる。

「笑うなよ、おい」

「すまんすまん。つか、つばきの方が遠野と仲いいんじゃない？」

こいつのコミュニケーション能力は、俺が見ていてもわかるくらい高い。

「遠野さん、おとなしいだろ？ ちよつとでも反応見せてくれれば、後は何とでもなるんだけど、完全にビビっちまって何も言ってくれないんだよ。つばきに頼むのは嫌だしさ」

状況が想像出来る。あのおとなしい遠野の事だ。

「まあよく考えてみると、つばきは助けてくれないだろうな」

つばきは、ああ見えてかなり友人思いだ。

そんな彼女が、修二郎という化け物を遥と付き合わせるような事はしないだろう。

「だろ。な、頼むぜ佑介」

なんとというか必死だ。

「メシ奢れよ」

「ああ。頼むぜ！」

両手を顔の前で合わせて全力で頼まれると、どうしても断りきれない。

なんだかんだ言って、長い付き合いだし。

結果がどうなるのかは目に見えているが、これくらいはやってもらいたいだろう。

「遠野、おはよう」

「何かわざとらしいなー？」

カンの鋭いつばきが、こちらを一瞥するなり詮索の視線を入れて来る。

それを軽やかにかわし、視線を遠野に向ける。

「あ、山中くん、おはよう。どうしたの？」

「つばき、先生が呼んでたぞ。職員室行ってこい」

勿論嘘だ。これは良い嘘。

「？ ホント？」

この恐ろしい猛獣をここから取り除く為だ。

もしも、つばきがいたら修二郎の願いを聞く事は出来ないだろう。

「マジマジ。行って来い」

訝しみながらも、つばきはくりと身を翻した。

「うーん……？ じゃあ、行って来るね。はるはる」

「うん。行ってらっしゃい」

何回かこちらに振り向きながらも、つばきがしつかりと、教室の外に出て行った事を確認して、

「計画通り」

小さく呟いた。

「何の計画？」

「こつちの話。それでな、遠野。お前と話したいって奴がいるんだけど」

心配そうに俺の顔を見つめる遠野。

彼女はかなり顔見知りする。俺と最初に会った時も、つばきの後ろに隠れていたくらいだ。

「え？ 誰？」

「あいつ」

きりつとした顔で、髪の毛を弄っている修二郎を指差すと、遠野は露骨に嫌な顔をした。あー あ、これは完全に脈無いぞ。

「岡田くん……？」

そして不安げに呟く。

「話してやってくんねえかな？ 話したいらしいんだ」

「あの、えっと……」

しかし、一度話して諦めさせてやらなければ、片思いをしている修二郎が可哀想だ。

「見てくれが怖いのはわかってる。あいつの見てくれはチンピラだ。でも、中身は良いんだよ、マジで」

それは嘘偽りの無い言葉だ。

「……そうなの？」

「そうそう。優しいんだぜ。ほら、見てみるよ。あいつスーツ姿だろ……って、なんでスーツに着替えてんだよあのバカは」

次に修二郎を見ると何故かスーツに着替え、ネクタイをくいくいと弄っていた。

一体何がしたいのか。

アホか。

バカか。

俺にはさっぱりわからないが、遠野にはつけたようで、

「ぷっ」

思わず吹き出してしまっていた。

まあ、俺でも笑う。

「あー、笑われちまったな」

「ご、ごめんなさい！」

がくりとうなだれる修二郎を尻目に、俺はフォローを重ねる。

「話すだけでもいいから、一度話してやってくれ」

「う、うん……」

よし、了解を貰った。

後は修二郎に任せるだけだ。

「おい、修二郎！ こっち来いよ！」

「待ってました！」

風、音速で飛び込んでくる修二郎。

早すぎる。

明らかに遠野が引いている。

「お、おはよう」

それでも礼儀正しく挨拶を交わす遠野。

「遠野さん！俺とつきあっ……」

そんな遠野にいきなり告白しようとしているバカを、俺は思いっきり殴りつけた。

「バカかお前は！」

「いでえ！」

頭を抱えてうずくまるスーツ姿のチンピラの襟を掴み、教室の隅っこへと連れて行く。

「……ちよつとこつち来い！遠野、ちよつと待っててくれ」

「？」

「何すんだよ、佑介」

小さな声で囁き合う。

「何でド頭にコクってんだよ。戦果は目に見えてんだろ」

「だってよ、時間掛けすぎるとあいつが帰って来るぞ」

「メルアド聞くとか、電話番号聞くとか、色々あるだろ。それにあいつはまだ帰ってこねえよ。職員室遠いだろ」

「誰が帰って来ないって？」

「つばきだよ。あいつが帰って来る前に聞いとかないと面倒だろ」

俺は答える。しかし、どこか違和感があった。

「何を、誰に聞くって？」

あれ、修二郎の声でも、遠野の声でもない。

この声の主は？

「遠野にメルアド聞くんだろ？……え？」

「へえー。あたしを誤魔化して、そんな事をしようとしてたんだ？」

隣の修二郎は、既につばきの鉄拳に沈んでいる。

「つつつつばき！なんでお前がここに！」

鬼の形相で拳を握りしめて立ち尽くすつばき。

そう、こいつは喧嘩が強い。

女だから、そんな事なんて全く関係が無い。

可憐なこの肢体に、どのような能力が隠されているのかと思わせ
るくらい、血みどろの殴り合いになっても食らいつく、

まさにこの学校では最強のチンピラ女だ。

修二郎くらいならのせてしまう。

「職員室で恥かかされて、もしかしてと思って、急いで戻って来た
んだよ！ あんた達、はるはるに手出したら許さないからね！」

「つ、つばきちゃん……そこまでしなくても……」

心配そうにのされている修二郎を見つめてうるたえる遠野に、

「いいや、はるはる。あたしはこのチンピラが、どんな奴か知って
るからね。はるはるには勿体ないバカだよ、これは」

修二郎への罵詈雑言を吐きつけるつばき。

特にバカの部分が強調されている。

自分もチンピラの癖に。そんな事は口が裂けても言えないが。

「ひどいっ！」

「あんたもでしょ、佑介」

「いや、今回の事は、修二郎が全面的に悪いです」

即答。戦略的撤退である。

「じゃあもつと制裁しておかないとね」

倒れている修二郎の脇腹に思いっきり蹴りがぶち込まれる。

「こうなる事は目に見えていたんだけどな」

すまん、修二郎。ハイリスクハイリターンだぜ。

「ほんつとに！ 信じられない！」

学校を終え、帰宅する俺達。

修二郎はとぼとぼと俺達と反対方向に帰って行った。

あの可哀想な、悲愴な後ろ姿は今後何度も見れるものではないだ
ろっ。

「いやまあ、修二郎だって、遠野と話したかったんだ」

あんなにしょんぼりとしている修二郎は久しぶりに見た。
そんなに好きだったのだろうか。わからん。

「だからってここまでする？」

「それは何とも言えない」

しかし、つばきの怒りは収まる所を知らないようだった。

「あたしに言ってくれば、きちんと対応くらいはするのに」
つばきの対応、面会謝絶が良い所だろう。

だからこそ、修二郎は俺に頼んだのだ。

「その対応があれだったんだけどな」

「何か言った？」

ぎろりと睨みつけられた俺は固まるしかなかった。

「何でもないです」

即座に対応する俺。

ここで逆らっても良い事なんてない。

「はるはるは、あたしの大事な友達なんだから。こんな事されたら、
あたしが怒るのもわかるよね？」

「その通りでございます」

イエスマンに徹しよう。そんな気持ちだった。

すると、彼女は髪の毛をくしゃくしゃとかきむしり、勢いよく駆け出して行く。

「あー！ むしゃくしゃする！ バイトの先輩にイライラぶつけてくる！」

「そっぴや、つばきは何のバイトしてんの？」

去り際に尋ねるが、

「内緒！ んじゃね！」

彼女はまた教えてくれなかった。

以前何度か尋ねた事があるのだが、その度にはぐらかされてしま
うのだ。

「行っちゃった」

まあ、言いたくない事かもしれないので、触れないでおこう。

そして俺は再び家へと向かい始めるのだった。

「ただいまーっと」

今更ながら両親と妹は海外に行っている。

長期の滞在になるらしく、面倒くさいので俺は日本に残った。
今この家にいるのは一人だけのはずだ。

はずなのだが、雰囲気がおかしい。

誰かが居る気配がする。

長らくしていなかった料理の匂いがする。

その証拠に味噌の匂いが家の廊下に届いていた。

「……」

もしかすると、留守を狙って料理をして勝手に食う、そんな泥棒かもしれない。

俺は玄関に置いてあった金属バットを手に取り、家の中を進む。

進む度に、包丁でまな板を叩く音が大きくなって来る。

「誰だ？」

リビングの扉を開く。

するとテーブルの上には、湯気の立ち上る味噌汁に漬物、ほこほこの卵焼きに、湯気立ち上るご飯に、焼き魚と生活感漂う料理が並べられていた。

面倒だから、とコンビ二飯か、カップ麺で済ませて来た俺にとっては、消失して久しいまともな料理である。

「うわ、なんだこれ！」

思わず金属バットを床に落としてしまった。

からん、という甲高い音がリビングに響き渡る。

「あ、こんばんは。ゆうさん」

音に反応して、奥から現れたのはエプロン姿の着物の死神少女、桜子だった。

「桜子？」

「はい」

俺の頭がついていかない。

朝はあんなに俺の記憶を消そうと躍起になっていたのに、今はまるで落ち着いている。

「えっと、どうしてここに？ 俺の記憶は消さなくていいの？」

何があつたのか。

「上司命令なので、大丈夫です」

「ああそうなの……」

何はともあれ、消されなくて済むのならそれで良い。

俺の記憶から桜子を消されてしまうのは、恋を冒瀆されているように嫌だったからだ。

「どうぞ召し上がって下さい」

「食べられるの？」

死神と人間の食う物って同じなのだろうか。

「それはわたくしの料理の腕に不服があるという事でしょうか？」

「い、いや別にそういう意味じゃなくてさ。桜子は死神なんだろう？」

どうして料理作れるんだ？」

「死神は人間の姿をとって、この世に実体化する事も可能なんです。元々は、あなた達と同じ人間ですから」

確かに、見てくれは完全に人間と同じなのだ。

もし、何も知らない人間に対して『桜子は死神です』なんて言うてしまったら、俺は完全に、頭がお花畑な人扱いされてしまうだろう。

「そうなのか」

「はい。ですから、安心して召し上がって下さい」

笑顔で料理を指し示す桜子。

「聞きたい事は山ほどあるけど……。とりあえず食おうかな」

「どうぞ」

目の前にある料理はどれもうまそうだ。

死神が作ってくれた料理、どのようなものか。俺は今まで経験した事のない未知の領域に足を踏み入れようとしていた。

「うまそうだけど……」

「部下はいつも喜んでくれます」

「へえ……それじゃいただきます」

箸を手に取り、料理を口に運ぼうとする。

「……」

それをじつと桜子は見つめていた。

「そんなに見られてると、食べづらいんだけど」

「あ、そうですか？」

「それに桜子は食べないのか？」

よくよく見ると、料理は俺の分しか用意されていない。

「わたくしは既に済ませましたので」

「ふうん……あ、普通にうまい」

何だろうか、数年や数十年作り上げただけでは完成しない、多くの年月を経て磨き上げられたような、複雑な味わいが、たかだか卵焼き一つから伝わって来た。

死神という事は、俺よりも長い間を生きて来ているのだろう。

積んで来た経験も違っただろう。そんな事が素人の俺でも簡単にわかった。

「それは良かったです」

「それで、質問いいか？」

俺は一旦、箸を置いた。

「わたくしに答えられる事でしたら」

すると相変わらずの微笑みを俺に向けながら、桜子は答えた。

「桜子は何者なんだ？」

「死神です」

きょとした表情をする桜子。俺が聞きたいのはそんな答えで

はない。

「……うん。死神なのは知ってるんだけど、なんちゃら死神庁、みたいな事言ってなかったっけ？」

「ああ、えーっと簡単に説明しますと、天界死神庁は、死んだ人間を管理する天界のお役所です」

なんか俺の想像する天界の姿が壊れる。

「天界にも公務員みたいなのがいて、それが桜子ってわけ？」

「そうなります。わたくしは天界死神庁の日本支局に勤務しています」

「なんだっけ、移送課とか言ってなかったっけ？」

最初に会った時、天界死神庁日本支局移送三課の課長と名乗っていたはずだ。

一体どのような仕事をしているのだろうか。

「移送課は、地上に居る霊を、天界まで引き上げる仕事を任せられています。移送三課、その課長がわたくしになります」

俺が以前見たオッサンの姿が消えたのは、消えたのではなく、天界へと連れて行かれたのか。

「じゃあ偉いのか」

「それなりです」

桜子は微笑み続けているが、どこかその笑いは作り物のようで、朝に見たあの慌てふためく表情の方が自然だった気がする。

「そ、そうなのか」

「それより、お料理が冷めてしまいますよ。先に食べて下さい」

「あ、ああ……」

「それではわたくしはこれで。空いてる部屋ありますか？」

きびすを返し、桜子は去って行くこうとする。

そして意味深な言葉を俺に投げかける。どういう意図があつて聞くのだろうか。

「妹の部屋が、今は空いてるけど？」

「しばらくお世話になってもよろしいですか？」

桜子のさらりとした言葉に、俺は一瞬頭の中が真っ白になった。

「え？　どういう事？」

そして問い返す。

「しばらくこの家にお世話になってもよろしいでしょうか？」

「桜子が？」

頭がついていかない。

そんな間にも、桜子は微笑み続けながら、弱弱しく答える。

「……ご迷惑ですよ、そうですね。わかってます」

「いやそういうのじゃないけど……」

まだ頭の中で考えがぐるぐると回っていた。

「……では失礼します」

去って行く桜子。

待てよ。

いいのか？

このまま帰してしまったっていいのか。

これはチャンスなのではないか。

「待った！」

そんな事を思った時には、もう叫んでいた。

「？」

「桜子、一緒にいよう」

すると、桜子は振り返って、

「……え？」

あれなんだろう、一瞬暗い顔をしたような気がする。

次に見た時には先程と同じ表情だったので、見間違いだろうか。

「部屋は妹の部屋使ってくれればいいから。二階の一番奥の部屋」

「わかりました。これからしばらくお世話になります。よろしくお

願います。……あ、お風呂入れておきましたので、また入って下

さいね」

一礼して、彼女は部屋から出て行く。

「いよっしゃあ！」

この時の俺は、これから良い事続きになるだろうと信じていた。
実際良い事もあった。

しかし、それよりも大変な出来事に巻き込まれていく事になるの
であう。

「断られると思っていたのに……」

わたくしはそれを期待していた。

いざなみ様も、受け入れ先が拒否すれば、それ以上何も言わない
と思っていたからだ。

「先が思いやられるなあ……」

ベッドに横たわり、何も考えずにぼーっとする事にした。

移送死神の仕事は、魂を天界に運ぶ事。

そして、地上にしがみ付く霊を、強制的に天界へと連れて行く事。

そんな死神は、人と関わってはいけない。

それを定めた天界死神庁の決まりを、日本支局長のいざなみ様は
思いつき無視している。

意図はどこにあるのか、わたくしにはわからない。

それでも、いざなみ様の道具として、わたくしがこのような事を
している。

「そろそろ、お風呂頂いても大丈夫だよね……」

時刻は午後十時。

部下は皆七時くらいには入っているし、そろそろ大丈夫なはず。

一日の疲れを取るにはお風呂が一番。

わたくしは着替えを持って向かう事にした。

「ふう……」

お風呂から出たらまた仕事が何件がある。

今日中に亡くなる予定の人がこの町にも数名いる。

そこに行かなくてはならない。

今まで幾度となく繰り返してきた作業、色んな想いがあり、まだ地上に残りたいという人もいる。

想いを断ち切り、事務的に連れ去るのが死神だ。

感謝される事は少ない。

「異動の申請でも出してみようかな……」

しかし、憎まれ役とはいえ、地上とのコンタクトが取れるのは、移送課所属の移送死神と、移送死神を監視する監視官だけだ。

わたくしはまだ監視官になる程の実績を積んではない。

地上とのふれあいは、退屈な天界での生活を紛らわす為にも必須だ。

「それでも……」

わたくしは殿方と同棲をした事がない。する前に死んでしまったから。

それ以降は、わたくしが見える人に会った事もなかった。

いざなみ様は何を考えているのやら……。

考えが煮詰まってきた。

そろそろ出よう。扉を開けると、涼しい外気が流れ込んで来る。

「え？ 桜子？」

はい？

そこには、ここにいるはずのない人がいた。

「えっと、桜子！ ごめん！」

ゆうさんの声が頭に響き渡る。

えっと、こんな時どうすればいいんだっけ？

そんな事を冷静に考えていると、段々と恥ずかしくなってきた。
どうしたらいいんだろう、今までこんな事なんか、なかったのに。

「きゃああああああ！！」

その甲高い叫びは、わたくしの意思に全く関係が無く、飛び出してきたものだった。

脱衣所で俺と桜子は視線を合わせて固まる。
これからどうしよう、どう転んでも修羅場の展開しか想像出来ないが。

沈黙を破ったのは俺だった。

「えっと、桜子！ ごめん！」

「きゃああああああ！！」

俺に裸体を視られた桜子が、甲高い叫び声を上げる。

「まさかいるとは思わなくて……」

言い訳をする俺に、

「服、そこに脱いであるじゃないですか！」

桜子は顔を真っ赤にして、胸を片手で隠しながら、片手で端っこの方に置かれていたパジャマを指差して言う。

「え？ ホントだ！」

全く気が付かなかった。

「出てってください！ 早く！」

「は、はい！」

物凄い剣幕で迫る桜子に、ただただ従うだけだった。

しかし、頭の中にはさつき見た桜子の姿が再生され続ける。

「やっちまったな……」

それにしても、可愛かったなあ。

食事の場での桜子は、どこか感情を抑えているように思った。

しかし、さっきの桜子は本当の気持ちを、見せてくれた気がする。それが良い事が悪い事はさておき。

うーん、後が怖い。

どんな事を言われるんだろうなあ。

予想は的中した。

俺はリビングで正座させられていた。

そんな俺に、黒いローブを身にまとった桜子が説教をする。

俺の首には、死神の鎌の刃が当てられている。

なんかひんやりとした感触が伝わる。

まさか、鎌まで実体化出来るとは思わなかった。

この状態でさつきから、三十分程、同じやり取りを交わしている。

「先に申し上げておきます」

「はい」

否定なんて出来る訳が無い。

笑っているが、目が全く笑っていないのだ。

「わたくしは、死神です」

「そのとおりです」

そろそろ足がしびれてきたなんて言えない。

「死神ですが、女です」

「よくわかります」

すると、桜子は鎌を床に突き立てた。ちょっと怖い。

「本当に、わかつているのですか？」

訂正、かなり怖い。

「はい」

「ではわたくしは仕事に行つて参ります。先に、お休みになられて

下さい」

刃を地面から抜き、桜子は背中を見せて立ち去っていく。

「な、なあ桜子」

「はい？」

呼び止めると、桜子は立ち止り振り向いた。

「俺、桜子の仕事見てみたいんだけど」

「以前、見たでしょう？」

「いやまあそうなんだけど」

あの時は、恐怖で全く頭の中に情報が入って来なかった。

「何にせよ、人間が立ち入るべき領域ではないです」

その表情は、仕事モードなのか、まるで氷のようだった。

「何とか頼むよ。桜子の頑張ってる姿を見てみたいんだ」

「結構です」

こう言われると思っていた。

しかし、俺は桜子が、死神が実際にどのように仕事をするのか気になっていた。

「邪魔もしないから」

「……絶対に、邪魔しない事を約束してくれますか？」

冷たい表情で、俺を刺すように見つめる桜子。

「ああ」

俺は頷く。すると桜子は微笑み、答え返す。

「なら、お連れいたします。お世話になってますし、お礼代わりに」

「何をするんだ？」

「ゆうさんを一時的に霊体にします。人に見つかりと面倒でしょう？」

「なるほど」

「わたくしの邪魔は絶対にしないで下さい。わたくしは移送死神、死者を運ぶ者です。妨害があれば、わたくしはそれを排除します。それがゆうさんであつたとしても」

ドクロの仮面を付け、桜子は冷たく言い放つ。

「あ、ああ……」

「では行きましょう」

桜子は俺の額を指で押した。

すると、もう一人の俺が倒れていた。

これが俺の肉体で、今の俺が霊体という訳か。

桜子は何も説明する事なく、俺を促した。今は彼女に全てを任せるべきだ。

そう思った俺は。黙って後ろをついていく事にした。

「おう」

「ここですね。……やっぱり霊はここに居ませんね」

「山本のバアさん、死んじやったのか……」

小さな部屋の布団の中で眠るように死んでいる老婆。

それを取り囲むようにして、息子と娘だろうか、こそこそと話をしている。他には誰もいない。

「対象者とお知り合いですか？」

桜子が尋ねる。

ドクロの仮面をつけているので表情は見えないが、どうして知っているのか、と疑問に思っているような声色だった。

「小さい頃、俺がよく行ってたおもちゃ屋の人なんだ」

つばきと修二郎の三人でよく通った。

中学校に進むにつれて、おもちゃ屋に行く事は無くなったが、よくしてくれた事は覚えていた。

「それにしても」

それだけに、俺は苛立ちを隠せない事があった。

「？ どうしました？」

先程から繰り返されている、親族同士の生々しい会話だった。

『なあ、あの店続けようぜ？』

『いやよ、面倒臭い。土地にして売ってしましましょうよ』

『確かにそうだな……。今時あんなおもちゃ屋なんてはやらねえもんな』

確かにあのおもちゃ屋は景氣の良い店ではなく、どちらかという
と閑古鳥が鳴いていた。

しかし死者の前で、この言いぐさはどうなのだ。

俺はこの二人をぶん殴ってやりたくなった。

「こんな時に胸糞わりい話だぜ」

「人間なんて、こんなものですよ。それに、あなたはあくまで部外
者です。個人の家の事情に、首を突っ込むべきではない」

桜子の言葉には重みがあった。

そう、彼女は何度もこのような現場を見ているのだ。だが、俺は
それだけで納得出来るような人格者ではない。

「そうだけどさ……」

「では行きましょう。まだ若いあなたには毒です」

俺に反論するスキを与える間もなく、桜子は俺の手を引いて歩き
出した。

霊体になった俺達に壁なんて関係ない。すり抜け、目的地まで一
直線に歩いて行ける。

「ああ……。行先にあてはあるのか？」

「ゆうさんが今、対象者はおもちゃ屋の人だと、言ったではありま
せんか」

後ろを振り返らず、桜子は言う。

「どういう事だ？」

だが俺には何の事だかわからない。すると、桜子は続けた。

「霊は、思い入れのある場所に行くんです」

「だからおもちゃ屋にいつて事か」

あんな親族の会話なんて死後に聞きたくないはずだ。

だから、バアさんは思い入れの強いおもちゃ屋に行った、桜子は
そう言いたいのだろう。

「そういう訳です。駅前の山本玩具店に行きましょう」

無言のまま例のおもちや屋に足を延ばす。

シャッターをすり抜けて中に入ると、先に入った桜子が自己紹介を始めていた。

「こんにちは、山本さん。わたくしは天界死神庁日本支局、移送三課の三条桜子と申します。今からあなたを天界へとお送りします」

「おやまあ。死神さんかい？……おや、ゆう坊じゃないか」

そこには、バアさんがいた。

「バアさん、俺の名前覚えてるのか？」

「お客の名前は全部覚えてるさね。つばきちゃんと修君の三人でいつも来ていたね」

優しい、柔らかな表情で俺に笑い掛けてくれる。そうだ、こんな人だった。

「ああ……」

やんちゃ坊主だった俺達を優しく包み込んでくれた人だ。

「では、お送りします。すぐ済みますので」

「ちよつと待っておくれ」

桜子はその間にも、鎌を構えて準備をしていた。

そんな中、バアさんは彼女に懇願する。

「？ 理由をお願いします」

一瞬足を止めた桜子だったが、聞き入れる前に鎌を構え始めた。

「この店を息子か娘に継いで貰いたい。このままじゃ、死んでも死にきれないよ」

「伝言は受け付けておりません」

彼女はその懇願を、ただ冷徹に切り捨てる。

「酷いもんだねえ」

「死神です」

バアさんの嘆きも、桜子の前には無意味だ。

「桜子、その言い方は無いだろ？」

だが、さすがにこの言い方は良くないだろう。あまりにも、死者

へのいたわりがない。

「やめてください、ゆうさん」

そんな事を思っていると、桜子は鎌を俺に向け、

「何が」

戸惑う俺をよそに、寂しげな声で語る。

「邪魔されたら、排除するしかなくなるんです」

「頼むよ、死神さん。まだ死んでも死にきれないのよ」

縋りつくバアさんと、

「……」

何も言わず鎌を振り下ろす桜子と、

「桜子！」

それを制止しようとする俺。全てを無視しながら、

「ご冥福をお祈りします」

ただ桜子は眩き、バアさんを斬った。

「っ……！」

「では次に行きましょう」

バアさんをオッサンのように天界に送った後、何事も無かったかのようにきびすを返し、桜子は歩き出した。

「桜子、どうして……！」

俺は思わず、桜子の肩を掴み、揺さぶる。

すると付けていた仮面が外れ、地面に落ちた。

「ゆうさん」

「何だよ」

無表情の桜子は、俺を冷たい瞳で見つめた。

「あなたは約束出来ますか。さっきの会話を聞いて、あの二人にこのお店を継がせる事が出来ると、あの方に約束出来るのですか」

「それは……」

あの会話を聞いてしまったら、そんな事なんて無理だと思う。

見ず知らずの俺が乗り込み、あの店を継げと言っても、俺の意見なんて聞いてくれる訳がないだろう。

「出来ないでしょう」

桜子の凜とした顔が、俺を貫く。

「そうだけど……」

「ならば、口出しするべきではない」

「それでも言い方があるだろ！　まるで人を人と思っていないような……！　冷たすぎるだろ……！」

オッサンを斬った時もそうだ。バアさんを斬った時もそうだ。

ただ単に事務的に、地上の人の想いを無視して、天界へとぶち込んでいるようにしか思えない。

感情も無く、氷のように、淡々と業務を行っているようにしか見えない。

「このドクロの仮面、何の意味があって付けていると思いますか」
怒りに震える俺の足元に転がっている、ドクロを拾い上げて見つめる桜子。

「わからない」

ただそれをじいと思つめ、

「新人死神の表情、感情を隠す為ですよ。死神は常に、冷徹で無くてはならないのです」

再び顔に装着し直した。

「という事は桜子も、悲しくなるのか？」

「さあ……。忘れてしまいました。そんな感情」

「……」

仮面越しの彼女の表情は何う事が出来ない。

しかし、桜子の声色はどこか寂しげだった。俺はそんな彼女に追求をする事が出来なくなった。

「どうしますか？　ついて来ますか、帰りますか」

「今日は帰る。仕事、頑張ってくれ」

まだ仕事はあるという。

しかし、予想外のショックに頭がついていかない。どうにかなくてしまいそうだ。

「……聡明です。では、おやすみなさい」

桜子は俺の額を叩く。

すると意識が途切れ、次に目を開けるとそこはリビングだった。色々と思う事はある。

桜子の行動、死神の存在、仕事。

だが、俺が桜子を好いている事実は決して変わらない。

ただ、色々と思う事が出来ただけだ。

こんな時は考えても仕方ない。とりあえず寝よう。

そして翌日の朝。

「聞いて下さい、ゆうさん！」

何事も無かったかのように朝食を用意し、自分も席についている

桜子。

「う？」

「あの後、おじいさんの移送をしたんですけどね」

桜子は俺が就寝した後も業務を行っていた。

「あ、ああ」

あんな事があった後だから、場の空気が悪くなるかと危惧していたが、桜子は切り替えが早いらしい。

昨日の事について言及する事はなかった。

「いきなりわたくしの胸を揉もうとしてきたんですよ！」

「ぶっ！」

ずいっと前に乗り出しながら、桜子が声を震わせながら言う。

俺は思いつきり口に含んでいたご飯を噴出しそうになったが、手で押さえて何とかこらえた。

「いや、笑いごとじゃないですよ」

そんな俺を見て桜子は怖い目をしていた。

「ご、ごめんごめん……」

彼女は続ける。

「『嬢ちゃん、頼みがある』って言うから何か聞いたんですけど、胸を揉ませて欲しいってお願いだったんです。そりゃもう、断りましたよ。遠慮せず即天界送りにしようと思いました。いや地獄に送ってやりたかったんですけど。でも、その瞬間に突然こっちに突進して来るんですよ。勿論その前に斬ってやりましたが」

早口で怒りの言葉を捲し立てる桜子。

相当お怒りのようだ。

「怒り心頭って感じだなあ」

こんな桜子を見たのは初めてだ。案外、この明るい雰囲気の方が素なのかもしれない。俺はそんな事を考えていた。

「乙女ですから」

「乙女か……？」

霊は基本的に死んだ時の姿でいる事が多い。

でも、桜子は乙女という年齢ではないだろう、恐らく。カンだが。

「ゆうさんも、デリカシーに欠けますね」

邪推する俺をたしなめる桜子。

「すいませんでした」

この怖さは数年では出ない怖さだ。俺はわかる。

「わたくしは十三歳ですよ」

真顔で語る彼女に、俺は思わず持っていた箸を落としてしまった。

桜子が十三歳？

見た目はそんなものかもしれないが、あの立ち振る舞いで十三歳なんて信じられない。

「え？ 年下？」

「死んだ時は、ですが」

小さく呟くように言う桜子。やっぱりそうか。

「今は？」

「レディーに聞くものではないです」

返答されるものとは思っていなかったし、案の定彼女は、死後数年経っているのか教えてくれなかった。

「はい……」

これ以上この話題に突っ込むのはよそう。

そろそろ、死神の鎌に手が伸びてもおかしくない。

少しの沈黙が流れ、朝食を食べ終えた桜子が箸を置いた。

そして、口を開く。

「……それにしても、あのおじいさんみたいに、日常に満足した人を移送する時は、気も楽なんですけどね」

昨日の事について言及しているのか。彼女は遠くを見つめながら、しみじみと語った。最初に会った時、オッサンを斬った時もそうだ。彼は未練に満ちていた。

それをこの死神は強制的に、天界へと送り込んだのだ。

「珍しいのか？」

「珍しいですよ。人間何かしら未練を抱えているものですしね」

「ふーん……」

桜子の言葉は何となくわかる気がする。

俺だって未練タラタラだ。やりたい事なんてまだまだやり切っていない。世の中の人間は、そんな人が大半だろう。

「わたくしも、出来るのなら、何か最期に、お手伝い出来る事があればしたいんです。死神である以前に、元々は人間ですから」

「……」

初めて会ったあの時、オッサンは桜子と何か会話を交わし、笑っていた。

もしかすると、家族に言葉を伝える事を了承したのかもしれない。「でも出来ない事って、やっぱりあるんですよ」

だが、今回は桜子に干渉出来る問題ではなかったし、俺にもどうする事も出来なかった。

「確かにそうだけだなあ」

そういう訳で納得する面もある。俺は頷いた。

「ゆうさん、ここで一つお聞きしたいです」

突然、話の雰囲気が変わった気がする。どのような事を聞かれるのか構える。

「うん？」

「わたくしと、一緒にいる事が嫌になったのでは？」

真剣なまなざしで見つめる桜子。

「何で？」

質問の意図がわからない。どういう事を考えて俺に尋ねるのか。

「これで、死神の本質がわかったでしょう」

「よくわかったよ」

移送死神、霊を天界へ運ぶ死神がいるという事。桜子はその移送死神だという事。色々な事がわかった。そして、死神ならではの葛藤も。

「もう関わりたくないでしょう？」

小さく、呟くように言う桜子。

「でも、桜子は桜子だから」

「え？」

関わりたくないわけがない。

俺はこの桜子が好きだったのだ。

どんな事があっても、嫌いになる事なんてない。

確かに、昨日は驚かされた。桜子の冷徹な面を垣間見た。

だがそれは、桜子に対する評価に一切関係がない次元の話だ。

桜子個人ではなく、移送死神という別枠の話になる。

「死神とか、課長だと言う前に、桜子は桜子だから」

考えの趣旨を伝えたが。

桜子はあまり納得出来ていないようで、不服な表情を浮かべていた。

「意味がわかりません」

「死神って嫌だなあっと思う事はあったけど、だからといって桜子

が嫌いになるわけじゃない」

「よくわかりません。わたくしは死神なんですよ？」

少し時間を掛けて説明、力説したかったが、これ以上時間をかけると学校に遅刻してしまう。俺は箸を置き、席を立つ。

「う、うん……。あ、学校遅刻するわ、行つてきます！」

「……行つてらっしゃいませ」

背後から桜子の声を受け、学校へと走り出す。

「どういう意味なのかな……」

家に残り、わたくしはゆうさんの発言の意図を考えていた。

わたくしはここから離れたいと思っていた。

もう、いざなみ様のおもちやにされるのは嫌だった。面白くない。

でも、それはちょっと前までの話。今は、あのゆうさんに興味があつた。

ゆうさんには、昨日かなりシビアな場面を見せた。

新人死神なら、いや、昔のわたくしならどうして良いかわからず、泣くか、無理に干渉して上司に怒られ、泣かされていただろう。

でも、ゆうさんはそんなシビアな場面で、口では懸念を示すものの、わたくしを無理に止めるといふ、暴拳に出る事は無く、行動という意味では冷静だった。

それに、あの人は「桜子は桜子だから」と言った。

わたくしは、かなりの昔から、移送死神であり続けている。

そう、わたくしはただの「死神」なのだ。

それなのに、あの人は何故「桜子」であるわたくしに固執するのか。

「死神」と「桜子」を分離して考えるのか。

どうしてなんだろう。

桜子との話に時間を使いすぎたので、焦って学校まで向かった。
教室には、修二郎が既にいた。

「あれ？ つばきは？」

「いや、知らん。お前こそしらねーの？」

しかし、つばきと昨日ゴチャゴチャとした事があつた遠野がいな
い。

「会ってないからなあ」

「珍しいよな」

今までつばきが学校を休んだ事は俺が確認している限りではない。

「ああ……」

「そついや、遠野さんも休みなんだよなー……」

修二郎は本人不在の、遠野の席を見ながらため息をつく。

「それは、お前が昨日やらかったからじゃね？」

「さりげなくへこんでるんだから、やめてくれよ」

「すまん」

想いに水を差すような行為をしてしまった事を謝る。

こいつは本気で遠野に惚れているようだ。

それなら友人として手伝える事はやってやるべきだと思った。

「でも俺はまだ諦めないぜ」

ぐっと拳に力を込める修二郎。

「それでこそ修二郎だ」

「あー。遠野さんこねーかなー」

この時の俺達は、その程度の事しか思っていなかった。まさか、あんな事になるなんて思ってたのだ。

それは、ある日突然やってきた。

ある日。朝から真つ黒なローブを着こんだ桜子を見て、俺は言う。
「あれ、桜子もどこ行くのか？」

あの服を着ている時は、彼女が仕事をしにいく時だけだ。
普段は違う服を着ている。

「はい。天界死神局の管理課から、午前九時四十五分ちょうどに、修二郎さんの学校近くで、交通事故が起こる予定と聞かされまして、今から移送の準備を部下と共に始めます。事故での死者は、自分が死んだと認めるまでに、時間がかかりますからね」

何となく嫌な予感を覚えた。

俺の学校の近くで、誰かがもうすぐ死ぬ。

「え？ それって俺かもしれないの？」

「ゆうさんは大丈夫だと思いますよ」

不安を打ち消すように、にっこりと微笑み桜子

「ふーん……でもさ……」

懸念を表明しようとする、

「ゆうさん、余計なことはしないでくださいね。あなたには、防げませんから」

俺の考えをわかってか、桜子は強い口調でくぎを刺す。

「どうしてなんだ？」

目の前に死ぬとわかっている人間がいるのに、それを放っておく事は俺には出来ない。出来るものなら助けてやりたい。

死神少女、桜子はそんな思いを打ち砕く。

「死ぬべき人間が、死ぬべき時に起こる、絶対的な作用だからです」

「桜子はどう出来るんだ？」

少しの望みをかけて、俺は桜子に尋ねる。すると彼女はあつさと答えた。

「死を司る死神ですから。その人間を生かす事も、殺す事も可能ですが」

「じゃあ……」

「でも、仕事ですから。天界死神庁、上司の指示は絶対です」

「……誰が死ぬんだ？ 生徒？ 近所の人？」

桜子は死神の業務にかなり忠実だ。

組織の人間として当然の事だが、俺はそんな彼女に延命の願いを届ける事を諦め、誰が対象になっているのかを尋ねる事にした。

「管理課によれば女生徒だとか。名前までは知りませんが」

少し考え、桜子は答えた。

「ふーん……」

「では、ゆうさん。学校頑張つて下さいね」

笑顔で手を振る彼女の姿を見て、俺は微妙な気持ちになるのだった。

「ああ。じゃあ行ってくる」

そして、決心した。

「放っておく事なんて、出来ないよな」

時刻は九時四十分。

事故が起きそうな所と言えば、この学校前の横断歩道だ。

車通りの多い幹線道路に位置しており、赤信号でも突っ込んでくるトラックやバイクが後を絶たない。

ちなみに学校は完全に遅刻だ。

「そんなもんより大事な事ってあるよな」

そう自分に言い聞かせ、ただただ時間が来るのを待ち続ける。

「あれ？ 何してんだ、佑介」

「遅刻かよ、修二郎」

時刻は四十二分。

明らかに遅刻な修二郎が現れた。

遅刻にも関わらず、その堂々とした風貌、立ち振る舞いには感銘を受ける。

「そっぴや、あっちの方でつばきに会ったぜ」

「つばきに？」

修二郎は語るが、俺は頭の中で嫌な予感がした。

つばきがこちらへと向かって来る。

いつも真面目なつばきの事だ。

何らかの理由で寝坊して、焦ってわき目も振らず、走り続けるだろう。

そして事故に遭うのかもしれない。

「ああ。どっかに走って行ってたぜ。遠目にしか見てないから声は掛けてないけどな」

嫌な予感はますます高まる。

時刻は四十三分。

あと二分だ。

正直、修二郎の言葉なんて頭に入って来ない。

今はどうやって、目の前の知人の悲劇を回避するかだ。

「……あれ？　なんであんたらがここに？」

構えていると、いつの間に現れたのか、つばきがそこにいた。
「おい、つばき。まだ身体いてえんだけど」

「……つばき」

そんなつばきに対して、修二郎は先日について文句を言っていた。

確かに修二郎の怒りももつともだが、俺は今それどころではない。しかし、つばきが無事で安心した自分もいた。

「早く授業行った方がいいんじゃない？」

時刻は残り一分。

つばきは言う。

「少し大事な用事があってな」

「俺は先に行くわ」

手を挙げ、修二郎は先に向かつていく。

そりゃそうだ。今から何が起こるか彼は知らないのだから。

「んじゃまた後でな」

無理に引き込む訳にもいかない。

俺は修二郎の背中に声を掛けた。

すると、つばきが何か焦ったように

「佑介も行った方が良いよ」

と言った。

意図はわからないが、俺はまだ先に進むわけにはいかない。

「いや、後少し待つ」

時間になった。

向こうから、誰かが走って来る。

「遠野……？」

修二郎の想い人、遠野遥。

どうしたというのか。

「……はるはる？」

つばきが、茫然と遠野を見つめていた。

ここで待ち合わせしていた訳ではないのか、面食らったような表情を浮かべていた。

遠野は、遠くから見ていてもわかるくらい、焦っていた。

「遠野、気を付けろ！」

俺は声を上げるが、車通りが多い。

どうやら騒音に掻き消されて、全く声が通っていない。

「遠野！」

まずい、死ぬのはこいつなのか。

頭の中で修二郎の顔が浮かぶ。

目の前の道路には、多くの車が通っている。

街が動きだし、活発に息を始める時間だ。

通学時間と比べものにならないくらい、凶暴な鉄の馬は連続的に走り続けている。

「なんではるはるが……」

「……ちっ、あいつか！」

つばきの呟きに耳を貸す時間はない。

「あつ、佑介だめ！ 止まって！」

遠野は横断歩道を渡り始めている。

青い信号に安心して、彼女は走り続けている。

そんな彼女に、赤信号を無視した、自動車が迫っていた。

「遠野！ 来るな、戻れ！」

俺は走り出しながら、力いっぱい叫ぶ。

「え？ どうして山中くんが？」

きょとんとした声を返す遠野だったが、流石に、すぐ隣へと迫った自動車には気付いていた。彼女は表情に怯えの色を滲ませていた。そして、戻る訳でもなく、前に進む訳でもなく、立ち止ってしまった。

まずい、非常にまずい。

「くそおおおおっ!!」

やばい、間に合わない。

「遠野!」

瞬間、けたたましくブレーキの音が鳴り響き、遠野の身体が宙に舞う。

一瞬にも、永遠にも思える時間が経過し、彼女の身体は地面へと落下した。

「救急車! 救急車呼べ、つばき!」

俺は振り返り、そこにいるはずのつばきに叫んだ。
しかしどういう訳か、つばきは居なくなっていた。

「ちっ!」

悪態をつく暇なんてない。

俺は即座に遠野の下に駆け寄り、身体を抱える。

良かった、息をしている。

死んではない。

「救急車を呼んでくれ!」

今から処置すれば助かるだろう。

俺は車の運転手に向かって力の限り叫ぶ。

病院の一室。

真っ白な部屋のベッドに、様々な器具を取り付けられた遠野が寝かされている。それを取り巻くようにして、俺と修二郎が椅子に座っていた。

「……遠野さん」

「大丈夫だろ、外の空気吸って来いよ」

外傷よりも、頭の損傷が大きいらしく、遠野はまだ目を覚まさない。

霊となっていないという事は、まだ死んではいないのだ。

修二郎はさつきからずつと頭を抱えている。

その落ち込みようは、今まで一度も見た事がない程のものだ。

「……ああ。行ってくる」

「おう」

しょんぼりとした修二郎の背中中は小さく見えた。

そして人工呼吸器を取りつけられながら、すうすうと息を立てて眠る遠野を見て、俺は何とも言えない気持ちになるのだった。

「……ん？」

そんな時ふと、背後に気配を感じた。

修二郎が戻ってきたのかと思ったのだが。

「修二郎？ どうした？」

振り返ると、そこにはつばきがいた。

「つばき、お前どこに行ってたん」

だ、と言い要ろうと思った。だが、俺にはそんな事は出来なかった。

何故なら、つばきは真つ黒なローブを身に着け、鋭利な刃の鎌を手を持ち、表情を無にして立ち尽くしていたからだ。

俺はこの姿を知っている。

これが何なのか知っている。

死神だ。桜子と同じ、移送死神の姿だ。

でもつばきがなんでその姿をしているのか、意味がわからない。

「つばき、お前……？」

頭が混乱する。

俺の幼馴染は、悪友は、死神なのか？

「佑介、やっぱりあたしが見えるんだね」

「死神、だったのか」

ぼうつと透き通るような声で、つばきは言う。

俺は、現実味を感じられなかった。

目の前で起こっている事は現実なのか。

そんなぼんやりとした状況を、つばきは一言で打ち壊す。

「天界死神庁日本支局、移送三課。鈴森つばき」

「ずっと俺と修二郎を騙してたのか。死神女」

今まで俺が幼馴染だと思っていたもの。

それは死神だった。

どういう事なのか、意味がわからない。

「ごめん。人間らしい事がしなくなつて。騙すつもりは無かったんだ」

申し訳なさそうに視線を伏せるつばき。

俺はそんな言葉が聞きたい訳ではない。

「なんで死神なのに成長出来るんだ、小さかっただろ、幼稚園小学校の時」

「死神は姿を自在に変えられるからね。違和感がないように、少しずつ身体を変えていつてたんだ」

声色を青に滲ませて、つばきは語る。

「……」

どう反応すればいいのか、笑えばいいのか。

俺にはわからない。

「本当にごめん」

「あそこにいたのも、仕事の為か」

それならば、つばきがあそこにいた理由も納得出来る。

「うちの課長が、もしかすると邪魔が入るかもつて。だから止める

つもりで」

移送三課の課長は桜子だ。

桜子は俺に人間には防げない事だと言いながらも、俺が行く事がわかっていたのだ。

「遠野が轢かれるってわかっての事か？」

「そんなの、わかるわけじゃない！」

だが。

桜子と同じように、つばきもあそこで死ぬ人間が、遠野である事は知らなかったようだ。もしそうであれば、反応はもう少し違っていただろう。

「……」

「あたし達移送死神は、上からの指示に従って、霊を天界に送るだけ。詳しい内容なんて、課長でもわからない。下っ端なあたしじゃ、もっとわからない」

「……なあつばき。お前が来たって事は、遠野は死ぬのか？」

仮にそうだとしても、信じたくはない。

「多分。でも、予定が捻じ曲げられてしまったから、わかんない。はるはるは、あそこで車に轢かれて即死するはずだったらしいけど、佑介がいたからそこまで悪化しなかった。そこで運命が変わってしまったから」

つばきは何とも言えない口調だった。

「俺のせいかな？」

もしも俺があそこに居なかったら。

すぐ救急車を呼ばなかったら、遠野は即死していた。そんな事実が俺の頭をぐらぐらと揺らし続ける。

「おかげ、かな。はるはるをまだ連れて行きたくないから」
力なく笑い、つばきは言う。

「じゃあこれからどうするんだ？」

「待つ。死んだら連れていく。死ななかつたら、元に戻る」
淡々と、事務的に語るつばき。

その言葉には、諦めの色が滲み出ていた。

「助けてやれないのか」

何でこいつはこんなに傍観者でいられるのか。

仮にも、自分の友人なのに。

「助け……られないよ」

「どうして」

俺は苛立ちを隠せなかった。

「地獄にぶち込まれるから。はるはると、はるはるを助けたあたしが」

地獄。

何も知らないズブの素人である俺でもわかる。恐ろしい所、

苦しみ、いたぶられ続ける悪夢のような場所。そんな所に入るなんて誰でもごめんだ。

だが、これで一つわかった事があった。

「じゃあ、助ける事は出来るんだな？」

もしも、地獄に入れられないのなら、何とかする事が出来るのだ。

「出来るよ。でも出来ないんだよ」

「……」

空しくつばきの声が響き渡る。

「あたしは別に構わない。でも、はるはるを地獄に入れるなんて嫌だ」

その時、部屋の空気が少し変わった気がした。

凜、と俺の同居人が現れる気配がする。

「いいえ、この方は死にます」

冷たい、事務的な声が響く。

「課長……」

移送三課の上司、課長である桜子は険しい顔をして、病室のドアの所に佇んでいた。

その手には死神の鎌が握られ、獲物を探していた。

「桜子？」

「つーちゃん。移送の準備を」

淡々と部下に指示を出す。

「で、でも……」

しかし、つばきはその指示に不服なのか、声を詰まらせていた。

「仕事の邪魔はしないでくれと、言いましたよね？」

「確かにそうだけどさ……」

につこりと事務的な笑いを返し、桜子は再びつばきを見る。

「納得して頂けたようで何より。では準備を始めて下さい」

だが、つばきは異論があるようで、声を荒げた。

「課長！」

「はい？」

あくまで桜子は冷静だ。

「あたしはこの人を、はるはるを助けたいです！」

そうつばきが言った瞬間、桜子の表情は一転した。

先程までの事務的な笑いを吹き飛ばし、つばきの目を見て、軽蔑とも、憐れみとも取れる表情を浮かべた。

「……何を馬鹿な事を」

「馬鹿つて言われても構いません！ でも、はるはるは、あたしの友達なんです！」

眼に涙を浮かべながら、髪を振り乱しながら、

つばきは力いっぱい上司へと叫ぶ。

「鈴森つばき！」

それをなだめるように、桜子が叫ぶ。

「は、はいっ！」

我に返ったつばきが、ぴしつと背中を伸ばして答える。

それを確認した桜子は、

「地獄に、この子を、あなたの友達を、落としたいのですか？」

本質的な問題を指摘する。

「落としたく……ないですけど……」

「なら諦めて下さい」

諦めさせようとする桜子に、

「でも、いざなみ様に直接取り次げる課長なら、何とか出来るんじゃない！」

食いかろうとするつばき。

すると、桜子は黙り込んでしまった。

「……」

「いざなみ様？」

「天界死神庁日本支局長だよ。日本死神の頂点」
なるほど。

それなら何とかする事が出来るのかもしれない。

「わたくしに、いざなみ様とコンタクトを取れと？」

表情を強張らせるが、絶対に嫌と、そんな感じではない。

これはイケる。

俺は本能で感じ取った。

こうなれば後は押してやるしかない。

「桜子。何とか出来るのなら何とかしてくれやってくれ。遠野は俺達の大事な人なんだよ」

「ゆうさん」

「何だ」

すると、桜子は俺を向いて尋ねる。

「ならば、あなたが代わりに死の重みを背負いますか」

死神の語る死の意味。それはとても重いのだろう。

「え？」

簡単に『はい』、『いいえ』で答えられる問題ではない。

「いざなみ様は気まぐれです。代わりにあなたの命を代償にするかもしれません」

「それでも、やりますか」

「課長、あたしを人柱にしても良いですから」

人柱、つまりは自らを捧げるという事だ。

そんな発言をしたつばきを、桜子は一蹴した。

「あなたには聞いていません。わたくしはゆうさんの覚悟を聞いているんです」

そう、彼女は俺の決意を問いかけている。

人間一人の運命を変え、再び変えようとしている俺の決意を。

「覚悟は出来てる。桜子を信じてるし」

だが、俺に迷いはない。

命を失うか、失わないかの覚悟なんてない。

俺は桜子を信じている。自分の部下にそのような冷徹な仕打ちをするわけがない。

「わたくしを信じる？」

わざとらしく問い返す桜子に俺は言い放つ。

「桜子なら、俺達に悪い事はしないはずだから」

何より、俺に色々と教えてくれた事がその証拠だ。

「……」

押し黙る桜子に、つばきがもう一度懇願する。

「課長！ お願いします！」

「……ズルいですよ、あなた達」

につこりと自然な微笑みを俺達に投げかけ、言う。

「桜子……」

「いざなみ様に延命申請をします。つーちゃん。あなたの数百年分の報酬は、無駄に帰す事になりますが、良いのですね？」

「構いません。無駄ではなかったです」

死神としてそんなに長く活動してきたのか。

俺はその歴史に驚くとともに、報酬をあつさりと捨てる事が出来るつばきの、友人への気持ちに感銘を受けた。

「わかりました。次にゆうさん」

「お、おう」

くるりと俺を見る桜子。さて、どのような事を言われるのやら。

「取引として、これから数日はわたくしの言う事に絶対服従ですからね」

満面の笑みで語りかける桜子。正直怖い。

「わかった。桜子」

でも、それくらいは許容範囲だ。

「様付けで呼んで下さい」

前言撤回。少し許容できないかもしれない。

「桜子様」

でも、何とか許容してみせる。

「やっぱり無しで。ではまた後程。行きますよ、つーちゃん」

「ひでえ……」

その拳句にこれである。あまりにも酷い。弄ばれた。

「良かった……」

俺の悲しみなんていざ知らず、つばきは死んだように眠っている

遥を見て、安堵のため息をついていた。俺の心配は？

「まだ安心するには早いですからね」

「はい……」

「では行きましょうか」

俺に対する扱いが冷たい事はさておき、桜子は部下思いだ。

その点は良かった。そんな事を、二人の後ろ姿を眺めながら思うのだった。

遠野は意識を取り戻した。

たまたまその時、修二郎がいたもんだから、修二郎は舞い上がっ

てしまった。

非常にうざい。

「愛の力だよ、佑介！」

「ちげーよ、馬鹿」

何度同じ事を繰り返すのか。

繰り返される光景を見て、遠野は苦笑していた。

ほら、逆効果じゃねえか。

「あはは……」

「あ、まだやってんの！はるはるに触るなつたでしょ、バカ修二郎！」

騒ぎの最中、つばきがジューズを手に戻って来た。

こいつは死神である事がばれて以降も、俺と普通に接してくる。特に拒絶する理由もない。楽しければいい。

「うわ、暴力女が出た！」

「平和だなあ……」

こうして、チョークスリーパーを掛けられた修二郎と、一つの事件が終わりを迎え、少しの安息を迎える事になるのだった。そして、物語は動き出す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5685w/>

そして死神少女は、過去を運ぶ。

2011年9月11日03時12分発行